

台中日本人学校の特色ある教育活動

前台中日本人学校 校長

沖縄県那覇市立城北中学校 校長 小波津 繁 雄

キーワード：学校再建，教育活動の源，国際理解教育，現地校交流，管理者交流

1 はじめに

台湾は、北回帰線が通過する亜熱帯及び熱帯気候の島で、十分な雨量と温暖な気候に恵まれ自然が豊かで農業が盛んである。また、治安が安定し暮らしやすく、年間約90万人の日本人が訪れている観光都市としても知られている。本校は、創立22年目に当たる1999年、台湾大地震により校舎や運動場が大損壊し学校再開が危ぶまれた。しかし、幸いにも地震が真夜中に発生したため児童生徒や職員の生命の危機は免れ、当時の李登輝総統が素早く手を差し伸べ、台湾や日本政府、学校再建委員会など多くの方々の支援で学校が早い時期に再建され、以後目覚しく発展を続け今日に至っている。

赴任した年の2007年、創立30年の節目を迎え、これまで本校設立・再建に貢献してくださった方々へ深謝し、在校生や保護者、職員や関係者と共に更なる学校充実・発展を誓い、新たな活動を開始した。在任中は、将来、台湾と日本の架け橋となる人材、日本や世界で明るく平和な社会を形成する人材の育成に向け、台湾や地域の特色を生かした学校経営を目指した。

2 学校概要

(1) 学校を取り巻く環境

本校は、台中市内から約15 km離れた、台中縣大雅郷秀山村の静かな農村地帯の風光明媚な小高い丘にある。子どもたちのほとんどは、通学にスクールバスを利用している。近年は、大型工場建設が学校付近まで進出し、都市化に向かって変貌している。

(2) 学校施設

2階建て校舎で、職員室、普通教室、コンピュータ室、音楽室、技術室、家庭科室、理科室、図工室、図書室、生徒会室、進路指導室、教育相談室、中国語室、PTA和室、保健室、25 mプール、冷房付体育館、広い運動場、アスレチック、駐車場などの施設・設備が大変充実している。

(3) 学校設置・運営

本校は、1977年に台湾日本人会により設立され、委嘱を受けた学校運営委員会が運営に当たっている。運営委員会は、学校予算および決算に関すること、基金や寄付金及び借入金に関すること、校務方針及び報告の承認、現地で採用する教員及び職員の任免、学校運営に関する重要事項などについて協議し決定している。運営委員会は、年4回程度開催し、学校運営にかかる費用は日本政府からの補助金、授業料、入学金、海外子女教育振興財団からの援助金などにより賄っている。

(4) 在籍数・職員等

2009年3月1日現在で、児童111名、生徒26名の計137名。職員は、文部科学省派遣教員14名、現地採用の教諭2名、養護教諭1名、事務員2名、用務員1名、守衛1名の計21名。

3 充実した教育活動の源

本校教育目標の実現に向け、教育課程の編成を工夫し、教職員を研修部・学習指導部・総務部と幾つかの委員会組織を作り、積極的に研修を行い子どもたちの日々の指導に生かした。また、毎月発行した学校通信「大王やし」と「学級通信」は、保護者や関係者から大変喜ばれた。全校児童生徒の学校や台湾での生活の思い出を記した学校文集『北回帰線』や、職員の研究成果『研究紀要』は本校の教育実践の成果をまとめた貴重な資料となっている。

(1) 教職員研修

活動内容として、研究授業の実施や現地校との交流を行い、その他各月毎にテーマを設定し研修を深めた。研究授業は、全職員参加のもと道徳や各教科の授業研究会を実施し、授業後は指導法について熱心に協議を行った。また、現地校との職員交流や現地視察研修を通して現地理解に努めた。

(2) 基礎・基本委員会の活動

基礎・基本委員会を編成し、年間を通して基礎学力の定着や基本的事項の習得を図る補充指導を行った。主な活動内容として、児童生徒の学習状況の実態把握と分析のもと、朝学習を数年間継続的に実施した。朝学習で取り組む教科は算数・数学、国語で、プリント学習を中心に全職員で取り組んだ。また、学習の成果を確認するため、年2回の計算・漢字テストを実施し全員が合格するまで粘り強く指導を繰り返した。

(3) 現地理解教育委員会の活動

本校では、現地台湾の生活や歴史・文化を学び、外国のことを進んで理解する子どもの育成を図るため、『私たちの台中』や『ニーハオ台湾』の教材本を作成し、社会科副教材及び現地理解教育資料として、総合的な学習、特別活動、各教科などで幅広く活用した。平成20年度は、『ニーハオ台湾』の活用方法を探究するため、英語、音楽、社会、特別活動において指導案をもとに積極的に実践した。

(4) 教育課程の編成の工夫

学習指導要領に基づき、質の高い授業と充実した諸教育活動の実施を目的に、在外教育施設の特徴を生かし、教育課程の編成を工夫し教育実践を行った。特徴的なものを下記に紹介する。

- ①全職員指導による朝学習の実施（国語、算数・数学）と漢字テスト、計算力テスト
- ②小学部低学年のTT指導と、小学部での教科担任制の導入
- ③全児童生徒を対象に週1時間の日本語指導及び中国語指導（現地理解教育の推進）
- ④中学部の合同体育、5年生以上の週2回の部活動（7校時）
- ⑤学年音楽朝会、小学部の校外学習と社会科体験学習、学習発表会、宿泊学習、運動会、水泳記録会、校内マラソン大会
- ⑥小学部6年生の現地での修学旅行と中学部2・3年生の日本への修学旅行
- ⑦中学部2年生の新民高級中学中学部での体験入学と職場体験学習（キャリア教育）
- ⑧現地校との交流学习

4 特に力を入れた国際理解教育及び現地理解教育

在外にある教育施設では、国内の学校と同等の教育水準を確保しながら、その国や地域の特色を生かし、児童生徒に国際性や国際感覚を身に付けさせる教育を積極的に行うことが求められている。

本校に在籍している全校児童生徒の約50パーセントは、日本国籍と台湾国籍を持つ国際結婚家庭の子どもたちで

あるが、幸いなことに現地校との交流には大変関心を持ち積極的に関わろうとする態度が見られた。本校では、国際理解や現地理解を深めるため、現地語としての中国語の指導を教育課程に組み入れ、コミュニケーション能力を育てるとともに、現地校との交流学習を積極的に行った。その結果、お互いの国の文化の違いや良さに気づき、認め合い、互いに受け入れようとする寛容な態度が育ってきた。また、職員や管理者による現地校との交流は、現地教育を理解する良い機会となった。以下、交流の様子を簡単に紹介する。

(1) 屏東縣三地國民小学との交流：2007年・2008年

三地國小は、本校から約350 km南にある小さな学校で、本校とは毎年親しく交流を続けている。5月に行った本校の運動会には、三地國小児童、学校長やPTA会長他保護者多数を招待し、児童による原住民踊り(注)の紹介や両校でのリレーや台中音頭を踊り楽しく交流した。ほか、本校は毎年11月頃、小学部6年生の修学旅行の際にも、三地國小を訪問し交流を実施しているが、毎回テーマを変え、文化やスポーツ、踊り、物作り、昔から伝わる遊びなどを通して互いに新鮮な感動を味わっている。

(2) 台中縣汝鑿國民小学との交流：2008年10月18日



(姉妹校の汝鑿國小と交流)

本校から一番近い所にある汝鑿國小は、数年前から毎年交流を続けている姉妹校である。交流当日、汝鑿國小の全校児童・職員、PTA関係者多数が学校玄関前で整列し待ち受ける中、民族衣装を着けた児童の踊りも加わり熱烈に迎えられた。玄関先で行われた歓迎式では、汝鑿國小のリコーダー演奏や台湾太鼓演奏、両校代表児童の中国語と日本語によるあいさつ、両校の校歌の紹介で交流がスタートした。その後、各学年の教室や運動場に移動し、図工の合同授業と学級レク、スポーツを通して日本語や中国語を教え合いながら楽しく交流した。

(3) 台中縣大雅國民中学と交流：2007年・2008年12月



(國樂演奏をする大雅國中)

大雅國中(在籍2000名)の國樂部32名の生徒と本校中学部25名の生徒は、交流演奏、スポーツ大会、餅つきを通して交流を深めた。國樂部は、「阿美族舞曲」「竹影」の演奏で、本校生徒に台湾の音楽文化の素晴らしさを披露し深い感銘を与えた。また、合同で歌った台湾の代表的な「茉莉花」の合唱は、両校の絆を一層強く感じさせるものであった。交流では、英語や中国語が多く使われたが、コミュニケーションをスムーズに行うため、日頃の英語や中国語授業での学習の大切さを知った。

(4) 私立新民高級中学中学部で体験入学：2007年・2008年11月

本校中学部2年生は、毎年11月頃、新民高級中学中学部(在籍5500名)、進路学習の一環として5日間の体験入学を実施している。1日9時間の中国語と英語による授業は、緊張感や戸惑いもあるが、体験入学後の学校生活や進路選択に大きな刺激を受けている。

(5) 雲林縣光復國民小学で管理者交流：2008年11月11日

小講堂で、簡淑伶校長自らパワーポイントを使い学校紹介後、4年生のリコーダー演奏、2年生の唐詩朗読、中国太鼓演奏、5・6年生のローラースケート活動紹介と太極拳が披露された。また、授業参観、児童作品展示、学校農

場見学をさせていただいた。ベトナム人と台湾人の国際結婚家庭の子供が多く、言葉による学習障害の課題が山積しているが、細やかな学習指導と太鼓やローラースケートの活動を教育課程内に取り入れ特色ある学校づくりに成功しているとの説明があった。翌日の地方新聞では、日本人学校長が光復國小を訪ねたことが写真入りで紹介され話題になった。

(6) 台中縣九德國民小学で管理者交流：2008年8月20日

九德國小（在籍1800名）は、情報教育と音楽教育に力を入れている学校である。訪問した当日は夏季休暇中で、國樂クラブと弦楽クラブの児童が目を輝かせ生き生き活動していた。このような課外活動の講師は学校側で選定し、運営は講師と保護者が行い大きな教育効果をあげているとのことである。学校教育目標は、5育（徳育・智育・体育・群育・美育）で立てられ、國樂や弦楽は美育の一環として実践されている。また、読書は全ての学習の基礎という観点から「百岳計画」をスローガンに、6年間で100冊を読むことを目標に活動させている。校内の図書室は、100名ほどがゆったり入れる閲覧室と蔵書が備えられ、運営はPTAボランティアで行われていた。年々、学校予算が逼迫し、人員削減が進んでいる日本国内の学校からは大変興味深いことである。

(7) 他に交流を行った学校や団体（2007年4月～2008年3月）

- ①彰化縣育民國民小学：育民國小音楽部29名と本校全校児童生徒と交流
- ②台中縣清水区國民小学校校長会：校長先生方42名を本校に受け入れ教育懇談
- ③台中市忠孝國民小学：本校で、忠孝國小2・3年生と学級交流
- ④靜宜大学日文科：日文科22名が本校の各学年で授業参加、餅つき交流
- ⑤私立明台高級中学（高校）：明台高級中の施設見学と学校歴史・経営について、管理者交流

5 おわりに

平成19年度から2カ年間の文部科学省在外派遣期間において、本校の職員、現地の学校、台湾の方々、日本人会の方々から多くのことを学ぶことができた。本校教育においては、日本国内とは大きく異なる学習環境にも関わらず、子どもたちが真剣に学習し、縦割り班活動による清掃活動や行事に積極的に取り組む態度を育成できた。在任期間中、特に力を入れた国際理解教育（現地理解教育）では、自国の文化を誇りに思い、他人とのコミュニケーションができるよう言語能力を高め自分の意思表示ができること、自分と違った考え方を柔軟に受け入れる態度を普段の教育活動を通して学ぶ重要性を感じた。また、現地校の校長先生方や、本校と三地國小との交流の縁結びをした陳阿修・俊安さんとの出会いは、台湾を深く理解する良いきっかけとなった。奇遇にも、派遣1年目の本校創立30周年目に当たる祝年に、北京オリンピック野球アジア予選のため来台した星野ジャパン（星野監督、山本・田淵・大野コーチ）が2度来校し、子どもたちとの素敵な出会いを実現し大きな夢をプレゼントしてくださった。このことは、本校歴史に永遠に残る輝かしい出来事となった。この度の在外教育施設派遣にあたり、派遣していただいた沖縄県教育委員会、常に温かいご指導とご支援をくださった文部科学省国際教育課、海外子女教育財団、外務省、日本交流協会台北事務所、そして、大変お世話になった学校運営委員会、現地交流校、日本人会、台湾地元の多くの方々に心より感謝申し上げます。

〈注〉

台湾では、1994年から「台湾原住民」が正式名称として使用されている。